
COLOR

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COLOR

【Nコード】

N5353R

【作者名】

碧

【あらすじ】

田舎町に住むトーコは、実は警察と、警察である父親が大嫌い。平和な町で起こった子供2人の死亡事故。でも、それは事故じゃなくて事件だ、とトーコは断言する。

3人の仲間と事件の謎を探ることにした。だが仲間のひとりであるヘキジは、トーコ達に協力するふりをして、密かにある計画を実行していた。

事件の真相は？

そしてヘキジの計画とは？

小学6年の4人組の、ミステリーと、ちよつとだけ友情物語。

START（前書き）

実際有り得ないような展開があります。作者が未熟ですので御了承ください。また、誤字脱字等もありましたら、感想の悪い点などに書いて頂けると幸いです。

START

『この学校の生徒が行方不明になった』

6月2日、学校内はこの噂で持ち切りだった。

『誘拐されたんだよ』

『拉致だ、拉致』

根も葉もない噂が独り歩きし、みんなが浮き足立った表情だった。

この吉田町は、小さい町だ。そんな小さな事件だって、この町じや、かなり珍しい。

小学生が盛り上がるのも、仕方のないことなのだろう。

でも、春川^{はるか}橙子^{あけ}達は別格だった。ゴシップ好きの6年2組のなかで、少し違う色味のある4人組だ。

『いなくなつたのは2年2組の東海花^{あずまうみか}ちゃんと、その両親。一家揃って行方不明だって。身の回りの物が一緒になくなってるから、夜逃げだろうってさ』

橙子は冷静に、さらりと言つてのけた。

『へえー！おもしろーい』

更井翠夏^{さきい すいか}は手を叩いて橙子をはやし立てた。
すると三堀紅也^{みほり こうや}が呆れ声で言った。

『バツカじゃねーの？サライ。トーコはただ、親父さんから聞いたことそのまま言ってるだけだよ』

『そうそう、お前トーコと何年友達やってるんだよ。いい加減分かれつつの』

塩見碧次^{しおみ へきじ}も相槌を打った。

橙子の父は警察官だ。腕利きの刑事ということだが、平和な田舎の警察。仕事なんて無いに等しいくらいだろう。

橙子も、そこは理解しているので、暇つぶしの相手にと、放課後はよく署に寄り道している。

『トーコ、昨日も吉田署に寄ってたから、そこできいてきたんだ』

る？」

碧次はズバリ指摘しつつ、翠夏の髪を数本掴んで極細の三つ編みにしていく。その手つきがあまりに丁寧で、かつ素早いので、思わず見とれてしまいそうだ。

ただ橙子は、せっかく持ってきた情報を、『それが何？』と流されてしまったので、面白くなさそうだ。

「それよりさ、俺、ユウからそのウミカちゃんの情報きいてきた」

碧次は2年の谷村優たにむらゆうと仲がいい。

優の母親はシングルマザーで、優のことを溺愛している。そのため同学年の悪童と遊ばせてもらえなく、一見真面目そうな碧次が数少ない友のひとりというわけだ。昼休みにはよく、6 - 2に遊びに来るのだが、今日は来ていない。身体が弱く、学校もよく休むので、今日も休んでいるのかも知れない。

碧次は手先を高速で動かしつつ、唇も自慢げにまわし始めた。

「そのウミカちゃん、ユウの大親友なんだってよ。ユウの奴、親に秘密でその子と遊んだりしてるらしい。家が貧乏だし、最近父親が失業したらしいから、夜逃げってのは十分有り得る。ユウも、相当心配してた」

翠夏は、橙子と碧次がいつも張り合っているのを知っているので、話題を変えようと試みた。碧次の三つ編みも、されている本人は見えなくて暇だから。

「ヘキは相変わらず髪いじるの好きだね」

「話、変えんなっての」

あっさり言われてしまって、翠夏はむくれた。その間にも、三つ編みの束はどんどん増えていく。

「ほかには？その海花ちゃんって子の情報、ほかにある？」

紅也が、翠夏よりも数段うまく話を切り返した。

かと思われたが・・・

「俺はもうない。興味深々って感じ悪いだろうし」

「あとは知らない。あんまりその話に喰いつくと変に思われそうだ

ったから」

「だよなー。トーコ、隠し事がすぐに顔に出るからな」

「は？ウザー。四六時中ヒト騙してるへキに言われたくないし」

・・・逆に空気悪くしただけだった。

橙子はくせつ毛の先を眺め、碧次は三つ編みを編み続け、紅也は居心地悪そうに窓の外を見た。

何この空気……。翠夏は思わず、教室の窓を開け、換気をしたくなった。でも、いくら風を室内に入れても、四人の空気は流れそうに無い。

なんで、こんなに仲の悪い4人が、いつも一緒にいるんだろう。そのうちの1人でありながら、翠夏は疑問に思ってしまった。

まあ、分からなくも無い部分はある。翠夏は、橙子がいるから自分もいる。紅也も、碧次がいるから一緒にいる。

ただ、それだと最大の疑問が残る。なんで、橙子と碧次は一緒にいるわけ？？不思議でならない……。

結局、どんよりした空気のまま、昼休みは終わり、5・6限も淡々と進んでいった。

放課後、碧次は急に言い出した。

「トーコ、サライ、今日二人で吉田署行って情報もらってきて」

「は？何言ってるの？」

橙子は啞然とした。昼休みのあの空気はどうしたの？ゴメンの一言もなく、まるでなかったことみたいに。

「だって、色々気になるし」

碧次はケロリと言ったのけた。なんつつ図々しさ……！

「自分で行きなよ」

「命令すんな」

「そっちな」

ああもう！またかよ……。紅也は碧次のランドセルを引っ張った。

「ごめん、サライ。今日はトーコと二人で帰って。ホラ、行くぞ、ヘキ」

紅也は碧次を連れて、足早に去って行った。

「バイバイ、コーヤ！」

翠夏はその後ろ姿に手を振った。紅也、大変そうだな、と思った。

「じゃ、帰ろっか。吉田署行く？」

「いや。行かない！」

橙子は、碧次の態度に憤然として言った。

自分も、もしかしたら紅也と同じくらい疲れた顔をしてるのかもしれない。今日は早く帰ってゆっくり休もうかな。翠夏はそう考えた。

翠夏達は結局、吉田署には行かずにまっすぐ帰宅した。

夕方、翠夏が風呂に入っている間にケータイに着信があった。碧次からだった。用件はなんとなく察しがついたので、かけ直さなかった。すると22時頃にはメールが来た。

『吉田署、行ったか？』

翠夏はそれにも返信しないで、早めに眠りについた。

夢の中で紅也が自分から離れていく光景を観て、なぜか悲しくなった。

へんなの。別に紅也のことが好きなワケでもないのに……。好きなのは、卒業した沢村先輩なのに……。

見た目重視の翠夏にとって、丸坊主のチビの紅也なんて論外だった。

6月3日、翠夏は寝坊したので、親に車で学校まで送ってもらっ

た。教室に駆け込むと、なんと橙子が来ていなかった。あの橙子が。翠夏は不思議そうに席に着くと、紅也と碧次が近寄って来た。

紅也が震えを抑えるように低い声で言った。

「昨日、吉田署行かなかったんだな。・・・？」

「え、つと・・・うん」

「じゃ、お前、新しい噂も知らねえんだな？」

「新しい噂??？」

そういえばクラスの皆は教室のあちこちに輪をつくり、昨日にも増して深刻そうな、それでいて半分面白そうな表情で噂話っぽいをしている。

「何？噂って・・・」

翠夏がそうきくと、紅也は少し躊躇する素振りを見せた。

すると碧次が、昨日の橙子のように、さらっと言ってしまった。

「死んだんだよ。夜逃げしてた、東海花ちゃんが」

そして感情の無い声で、さらに言葉を次ぐ。

「ユウと一緒に・・・」

橙子は、3時間目でやっと来た。大遅刻だ。

「トーコ！お前何やってんだよ！！ユウとウミカちゃんが・・・」

紅也はハッと口をつぐんだ。

橙子は、分かってる、という顔をした。そして、手に持っていたコンビニの袋を碧次に突きつけた。

「見て」

昨日のことにはまだ怒ってるみたいだ。碧次も無言のまま受け取っ

て、中身を取りだした。

中に入ってたのは、コピー用紙の束だった。

「これ・・・」

碧次は啞然とした。

「これ、捜査内容のコピー？」

「そう。父さんの手帳盗んでコンビニでコピーしてきた」

橙子はそう言つてピースサインをした。碧次も今日初めて、ほんの少しだけ笑った。

「・・・ただこれ、手帳全部コピーだから、関係ない情報とかいっぱいあるの。次の4限、国語でしょ？あの先生ならバレなそうだから、国語の授業中に大事な情報だけまとめよ」

橙子はそう言つて、紙の束を4つに均等に分けた。

「ちよ、どういう意味？」

翠夏は混乱してきた。何で？何でこんな、一生懸命なの？警察の捜査情報盗んだり、授業中に調べたり。

「トーコ、急にどうしたの？」

すると橙子は思い詰めた表情になった。

「トーコ・・・？」

橙子は、紙の束を握りしめながらいった。

「警察は、ただの事故として、処理するつもりなの・・・。そんなはずないのに。父さんだつて気付いてるはずなのに・・・。」

いつもの高い声じゃなくて、本当にブチ切れたときの低い声だった。

「お前・・・」

碧次は下唇をかみ締めた。まだ、親父さんを許せないんだな。

「とにかく！」

橙子はパツと顔を上げて、いつもの調子で言つた。

「ただの事故なワケないんだから、警察が事故として処理しちゃう前に証拠出して、きちんと捜査させる！絶対にこのまま終わらせたりなんかしない」

橙子は、一度決めると絶対に諦めない質だ。

チャイムが鳴った。

「じゃ、これよろしく」

3人は、橙子から紙束を押し付けられ、同時にため息をつく。
橙子は本当に、人使いが荒い質だ・・・。

RED

『東海花ちゃん、8歳。溺死。』

紅也はルーズリーフにまとめながら、まるでデスノートみたいだと思った。

『死亡推定時刻、6月1日午後11時〜6月2日午前1時。

遺体発見現場、中野川河川敷（吉田町遊歩橋から下流に1kmの地点）

遺体発見時刻、6月2日午後4時頃』

50分の授業の中で、A4の紙20枚から分かったのは、たったそれだけだった。

紅也は少しがっかりした。もう少し、色々分かるかと思ったのに。
・
・

でも、4人がそれぞれ集めた情報を足すと、意外と多くのことが分かった。

『東海花ちゃん、8歳。溺死。

死亡推定時刻、6月1日午後11時〜6月2日午前1時。

遺体発見現場、中野川河川敷。（吉田町遊歩橋から下流に1kmの地点）

遺体発見時刻、6月2日午後4時頃。

・側頭部に軽い打撲のようなものあり。

・衣服の乱れ等なし。

・おそらく、吉田町遊歩橋から転落。河底に頭を打って気絶し、そのまま溺死したと考えられる。

谷村優くん、8歳。溺死。

死亡推定時刻、6月1日午後11時〜6月2日午前1時。

遺体発見現場、中野川河川敷。（吉田町遊歩橋から下流に1kmの地点）

遺体発見時刻、6月2日午後4時頃。

・外傷は特になし。

・川へ転落した海花ちゃんを助けようと、自ら飛び込んだと考えられる。

・被害者の靴とパーカーを下流で発見。水中で、溺れないように本人が脱ぎ捨てたと考えられる。』

と、こんなかんじ。なかなかだ。

碧次が事務的な口調で言った。

「ウミ力ちゃんは、ユウと違って泳ぎが得意だったんだ。中野川で泳いだこともあるらしい。河底に頭をぶつけて気絶つてのは、どうかと思う」

すると橙子も控えめにだが、同意した。

「中野川は最近の雨で増水してた。小学2年程度の体重で、河底まで沈むってことはないと思うよ。それも失神するくらいのスピードを保ったままなんてね」

2人の意見を書き出しながら翠夏は、心臓をわしづかみにされた感触がした。

碧次と橙子は、恐ろしいほど単調で、一切の感情を交えずに唇を動かしている。まるで、死んだのは赤の他人だとも言つように。

心配そうに紅也を見上げると、紅也も同じような顔をしていた。

そんな2人の心配をよそに、橙子と碧次は冷静に話し続ける。

「まあとにかく、こんなところで喋ったって意味ないし、ユウの親にでも会いに行くか？」

「ユウくんの母親ってどんな人？」

碧次がニヤリとする。

「おっそろしい女さ^{ヒト}」

優の家は豪邸だ。敷地のまわりを煉瓦の塀がぐるっと囲んでいる。ピンポン……

「ダメだ。留守かな」

インターホンを鳴らしても応答なし。木製の門は堅く閉ざされたままだ。

「留守って……ひとり息子が死んどいて楽しくショッピングなんかする人いる？」

橙子は塀の上から家の中を覗き込みながら言った。碧次が肩車している。

翠夏はバインダーにまとめたルーズリーフの『関係者一覧』をめくった。

今のところ分かっている事件の関係者は4人。

・谷村邦子、優の母親。

・東由衣、海花の母親。

・東勇一、海花の父親。

・小栗タミ子、海花の祖母。由衣の母親。

「さっきも言っただけど、あの人はマジでおかしいんだって」

「わかってるよ。ちゃんと書いた」

次のページには一人一人の性格や人間関係などが詳しく書いてある。情報源は碧次、記録係は翠夏だ。

・谷村邦子、34歳。

シングルマザー、無職、金持ちの娘、息子と二人暮らしだった。ひとり息子の優を溺愛。

所持品から友達関係まですべて自分が把握していないと気がすまない性格だった。

自分が気に入らない子とは一切接触させなかった。

学校や地域のクラブには所属させず、学校が終わったらすぐに帰

宅させていた。

言いつけを破った場合は外出禁止になり、学校にも行かせてもらえなかった。

邦子自身、外出が好きではなく、一日中家で過ごしていた。

友人関係も得になし。しいていえば、大学の頃と同級生から年賀状が届くくらい。

最近の趣味は、ネット通販で親の遺産を散財すること。

「だって、もともとお出かけなんか好きじゃなかったんでしょ？」

翠夏はルーズリーフを読み返しながら言った。

「息子殺して、いつも通り振舞えると思うか？」

紅也がさらっといった。

「コーヤは、邦子さんが殺した、と思うの？」

「ああ」

「なんで？」

翠夏は意味の無いことを訊いた。答えはみんなわかってる。

「勘」

ほらね、やっぱり。

「コーヤはいつも『勘』ばかり。トーコやヘキみたいな推測はないの？」

「まあまあスイカ、そう言わないの。コーヤの勘は当たるんだから」
そう、コーヤの勘は百発百中。この前の実力テストなんか、解答が三択だったから勘で100点取れた。「頭の回転速度はトーコとヘキの100分の1なのに」

「いいぞ、スイカ。もっと言え!!」

そう言った碧次は、紅也の蹴りを脛に喰らって、ふらふらとよろけた。

「ちよつと!!!!」

橙子は塀の縁にしがみついて宙吊りになった。あわてて紅也と碧次が足を支える。

その時、橙子は家のカーテンの奥に、何か見えた気がした。

「スイカ！この家に電話かけてみて。番号の非通知は解除して」

翠夏はバインダーから電話番号を探して、自分のケータイからかけた。

「・・・呼び出し音はしてるけど、出ないよ？」

橙子は窓の向こうに目を凝らした。ミラーカーテンの網目から、緑色の光が点滅してるのが見える。きっと電話の呼び出しを報せているんだろう。

ふと、その光が見えなくなった。

「切れた？」

「ううん。まだ鳴ってる」

つてことは、何かが光を遮ってるんだ。とゆうか、誰かが電話機の前に立つてるってこと。出るべきか切ってしまうべきか、迷ってるんだろう。

「あ、切れた」

「・・・」

橙子はスタッと飛び降りた。

「いるよ。居留守してるだけ」

「そう」

4人はしばらく無言になった。

やがて、橙子が言った。

「よし、いくか」

「いくつてどこに？」

橙子は扉の内側を指差す。3人は呆れた。

「どーなっても知らねーぞ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5353r/>

COLOR

2011年10月8日17時45分発行